

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生3・4年小説の部 優秀賞

ツヨシからのおくりもの

北陽小学校四年

梅野うめの

美咲みさき

「はあ：。」体育のじゅ業がある日は、いつもこんな気持ちになる。美咲がこの世で一番きらいなもの。それは、体育だ。四年生の美咲は、四月に時間わりをもらうとすぐに、体育の回数をチェックした。「今年も週に三回だ。」一年生の時からずっと週に三回。しかも、運動会が近づくとも体育は多くなる。美咲の好きな国語や算数は、運動会の練習のため、体育にのつとられてしまうのだ。

どれだけ体育が苦手かというのと、水泳のじゅ業では、毎年へたくソチームのじょうれんだ。泳ぐどころかうくことだってできないし、前に進める気がしない。シャワーだつてつめたいし、一秒でも早く時間が過ぎてほしいと思つている。上手チームの人たちは、楽しそうに二十五メートルをすいすい泳ぐ。まるでそこにいないかのように相手にねらわれない。しかし、最後の一人にのこつてしまったときは、サイアクだ。美咲は、にげまどうことしかできず、最後には結局当たつてしまう。どうせ当たると分かっているなら、最初から「負けました。」と言つてやめてしまいたい。だつていたい思いは、したくないから。でもドッチボールは、チーム戦。ちゃんとルールを守らなければいけないのは、分かっている。せめて、ボールをかすめるようによけるワザを身につけられたらいいのに。

美咲が運動オンチなのは、きつとお父さんとお母さんのせいだ。お父さんは、球ぎがへたくソだ。ボールを投げるすがたは、どこがどうとは言えないけど、なんか変。オリンピック競技の野球は一生けん命おうえんしていたけど、ルールは、よく分かつていない様子だ。お母さんは、マラソンがきらい。昔は、リレーの選手だつたとか、体育はオールAだつたとか言つているけど、たぶんうそだと思つて。だつてちよつと太つているし、家でもいつもゴロゴロしているから。そんなお父さん、お母さんでもすごいと思つる所もある。お父さんは、ボウリングでストライクをれん発するし、スケボだつてすぐに乗れるようになったから、バランス感覚はいいと思つる。お母さんは、ボールの投げ方やバットのふり方にうる

さい。美咲は、遊んでいるだけなのに、体重いどうやすぶりについてよく分からないせんもん用語を使つてしどうしたがる。

運動会の前日の夜、美咲はふしぎなゆめをみた。また今日も体育だ。「はあ：。」と美咲は、いつものようにため息をついた。すると、そのため息から小さくてかわいいようせいが出てきた。そのようせいは、小さな男の子のような声で「こんにちは。ぼくはツヨシ。いっしょに遊ぼうよ。」と言つた。ツヨシは、美咲よりも小さな男の子。ボールもうまく投げられないし、走るのだつて美咲よりもおそい。美咲はツヨシと遊んでいる時、自分が運動オンチだということをつかりわすれて楽しい時間をすごした。なんだかまぶしい。朝陽がさしてきた時、ツヨシは言つた。「楽しかったよ。美咲ちゃんは何でもできてすごいね。かつこいいお姉ちゃんだね。また遊ぼうね。」ツヨシの声がきえたしゆんかん、ピピピピといつものように、目覚ましがなつた。いつものようにごはんを食べ、いつもと同じ時間に家を出た。ただ、いつもとちがうことが一つあつた。何だか今日は、はれやかな気分。空は晴天で、気温もちょうど良い。すべてうまくいっている。何か見えない力が働いているような気がした。

今日は、きらいな運動会。まずは、ラジオ体操そうをして、学年順にときよう走が始まつた。とうとう次の次が美咲の番だ。「どうせ、わたしは、最下位だ。練習の時だつてそうだつたから。」美咲は、「はあ：。」とため息をついた。すると頭の上から声が聞こえた。「美咲ちゃんは、何でもできてかつこいいお姉ちゃんだね。」どこかで聞いたことがある言葉だ。「よいい、どん。」美咲の番になり、走り出す。いつもは、どうせ最下位だからとあきらめるところだが、今日はちよつとちがつた。何だかなんでもできる気がするし、力がわいてきた。げんざい、最下位。五位の人のおせなが見えてきた。力をふりしぼり五位の人をぬかすと、四位の人のせなが見えた。この時点で百パーセントの力を出しつくしていた。「あと一メートルでおいこせる。」美咲は百二十パーセントの力を出し四位のせなかを追いこした。そのままゴールし、結果は三位。万年最下位

の美咲にとっては大かいきよ。三位の旗の列にならぶ。平じよう心をよそおっているが内心は飛びはねてさけびたい。「ツヨシ見てる？わたし三位だったよ。」と。ツヨシの言葉は美咲の心を強くするまほうの言葉だった。最後まであきらめずに走ることができたのは、ツヨシのおかげ。美咲は自信にみちた顔で「ありがとう。」と言った。

